

質朴正直

自己の本心を曲げること、自己白身を偽ること、これ正しく明るく生きてゆくことを妨げる、唯一の原因であり、自己に対する最大の罪悪である。

故に、人は必ず己れを偽らず、他人を欺かず、その本心の声に忠実に生きねばならない。

赤と信ずれば赤と言ひ、白と信ずれば白と言うべし。

机上の朝顔は、紅と白のしぼりに咲き、瓶の桔梗は、紫ににおう。

権力に屈服するが故に、威圧を怖れるが故に、身の安全を望むが故に、僅かなる利益や、些々たる栄達を求むるが故に、本心の醜悪を覆うて、白と見せ、赤とおわせ、青と装う。七面鳥の如きあさましき存在となる時、その生活は天然の輝きを失つて灰色なる奴隷的生存となる。この人に成長なく、この人に真の喜びはあり得ない。

犯罪人は必ず、変装し、化粧し、人をはばかり、世をかかれて、常に逃避し遁走する。

平気を装うも内心常に不安に、笑顔を作るも内心笑わず、聞けども聞えず、見れども見えず、食えどもその味を知らぬのである。

されば、安住を求むるならば、その心を正直に、言行を謹み、正道を實踐すべきである。

粗暴、厚顔無恥、悪無碍、放縦、我儘勝手、本能自然等々は、天真に似、質朴に似るも、決して正直に非ず、質朴に非ず、まして仏道ではあり得ない。行者自ら戒めて心すべきである。

心弱き物は、小さき過にも、時に狂気となり、自暴自棄となり、自殺すら計る。

心強き者は、悪に狎れ、あくまで暴言暴力をふるつて、その本心を失う。暴力団は人の世を苦しむる虎狼である。

両者ともに、懺悔してその本心に帰り、合掌して正直の心を發揮し、汝自身を欺かざる天真の安住処を得なければならぬ。

不幸にして悪に走り、罪に濁れたる我を発見せる者よ。

悲しむなかれ、自暴自棄することなかれ。

必ず救われ、歓喜して生きる世界がある。一切を投げ出して、教えの前に合掌せよ。

たとえ、過去に千人の人を殺したりとも、求めて歩め。必ずそこに開ける絶対無碍の道がある。

親鸞聖人は、他力念仏の境地を自然法爾と言われた。自然法爾とは、人間の義はからいの尽くるところ、如来本願の義の顕現するを言う。自然とは人間の技巧を超え、はからいを超えたる、如来本願の生きた生命の天地である。人間の義は、如何に美しくとも無生命であり、人間の律法は、如何に形正しくとも無生命である。けれども、煩惱の動くまゝに流転して無自覚なるも、また、聖人の自然法爾の世界ではない。

如来廻向の念仏の中まじわにのみ、願力自然の世界がある。念仏すともなお自力のはからいの雑まじわるを、疑惑と言う。如来は人間のはからいを許し給わず、偽りを許し給わず、

諂へつらいを許し給わず、追従、妥協を許し給わず、自暴自棄も駄目、高慢も通らず、邪見はなおさら不可、祈願も聞かれず、請求も受けられず、ただあるがまゝの全体を、偽りなく投げ出して、如来本願の御はからいに信順する正直の心のみ、如来の生命と一如一体である。

自らを欺く者は、如来を欺く。

如来を盲にするに非ずば、人間は墮落することは出来ない。

「直心は是れ菩薩の道場なり」（維摩經）

真の道場は、建物に非ず、座敷にあらず、唯これ、正直質朴の心のみ。

随所に主となつて現在の一念に安住し、生死無常、煩惱濁悪の裏にも一掬無限の清涼境を得んと欲すれば、汝の虚偽を清算し、否定しつくして、如来の大悲に救われ、金剛不壞の大海に徹入して、一行一心、全我を如来至聖の火に打ち込んで、ただ正直の心に生きよ。

時に腐敗せる社会は、本心の声を殺して、小才小智、不正直の輩となれと求め、正直者を馬鹿者として嘲笑し、あるいは世間常識の命ずるままに生きて利口者になれと求める。

しかれども、質朴正直より外に汝自身を救わず、濁悪なる世間の声に妥協して本心を失い、汝を大苦悩に沈没せしむることなかれ。浅くして愚かなる世間の声に盲従して、汝を人形となすことなかれ。ただ生ける大法によつて、汝を不斷に培つて、端心正直を失わざれ。